

弁 納 才 一

はじめに

筆者は、これまで安徽省・江蘇省(蘇北の長江沿岸部と蘇南)や浙江省北部及び上海市を中心とする華東地域を何度か訪問し、そのうち江蘇省無錫市の2つの旧農村(榮巷鎮小丁巷と胡埭鎮馬鞍村)においては湯可成氏の協力を得て継続的に聞き取り調査を行ってきた¹⁾。

今回は、2014年12月12日(金)～19日(金)のわずか1週間足らずのうち、上海市と無錫市を訪問して、上海図書館で近現代中国農村社会経済史に関連する文献資料を収集すると同時に、無錫市の2つの旧農村(胡埭鎮馬鞍村と榮巷街道小丁巷)において聞き取り調査などを行った。とりわけ、今回は、前回(2014年3月)の聞き取り調査²⁾において時間的な制約によって詳しく聞くことができなかったことについても話を聞かせてもらうことができた。

そして、今回は、主に無錫市の2つの旧農村における聞き取り調査において通訳などをしてもらうために、金沢大学経済学類3年生の安地雅博(肖赫)君を同行させた。そもそも、安地君には、すでに3ヶ月ほど前の同年9月に河北省保定市の農村における聞き取り調査の際に通訳などとして協力していた。ただし、安地君が上海市や江蘇省を訪問したのは今回が初めてだった。

本稿は、主要には2014年12月中旬に訪問した無錫市の2つの旧農村(胡埭鎮馬鞍村と榮巷街道小丁巷)において聞き取り調査を行った内容及び無錫市内におけるいくつかの訪問地に関する報告書である。ただし、その後の2015

年3月26日～4月6日に、主に近現代中国農村経済史に関する文献資料を収集するために、上海市(上海図書館)と南京市(南京大学の新校舎の図書館)を訪問したので、その概況についても合わせて言及することにした。

なお、本稿においても、前稿までと同様に、主に煩雑さを避けるために、原則として算用数字と常用漢字を用いることにした。

I 聞き取り調査

(1) 無錫市胡埭鎮馬鞍村

聞き取り日時：2014年12月14日(日) 9:50～11:30, 12:30～14:40

聞き取り場所：無錫琳達織造有限公司3階会議室

聞き取り対象者：王望栄・王少生・呉文勉

聞き手：弁納才一・湯可可

通訳：安地雅博

王望栄の子供たち

・5男の王元松(未成年、2014年12月現在で61歳)は、高校を卒業した後、約7年間、中国東北部の瀋陽市で人民解放軍に入隊していた。そして、1976年頃に人民解放軍を除隊した後、無錫県労働局局長(呉允熊)専属のお抱え運転手を務めることになったが、1980年頃、呉允熊が人民代表大会委員に異動することになった際に、その運転手を辞めて、呉允熊の推薦(口利き)によって運送業に従事するようになった。当初は、1台の3トントラック(「躍進」というブランド)を購入して工場の原材料や製品を運送した。また、当時は、農村部が工業化するのに伴って工場(郷鎮企業か?)用の原材料やその製品を運送する運送業も盛んになっていた。そこで、1988年、胡埭鎮の自宅ビル1階で計8店舗の建材店を開設した。2014年12月現在、計8店舗のうち、「油漆」(ペンキ)を販売している1店舗を除く、7つの店舗を貸出している(後掲の写真1・写真2を参照されたい)。さらに、2002年、運送業を廃業して所有していたトラックも廃棄処分し、代わりにショベルカーを購入して地面を掘る仕事(土木建築業)

- に転業し、2004年には6台のショベルカーを購入するほどまでに営業が拡大・発展した。なお、1台のショベルカーにつき、正の運転手と副の運転手との計12人を雇った。この12人は、「労働市場」(民間の職業紹介所)で雇用したが、全て若い外来者で、安徽省や江西省の出身者が多かった。
- ・王元松の妻(蘇麗雅, 未年・1955年生れ)は、馬鞍村と同様に胡埭鎮の周辺に位置していた楊湾(馬鞍村から約8 km離れている)の出身である。王元松は、2008年にその楊湾が村ごと取り壊されることになる直前になって、自分の戸籍を馬鞍村庄橋頭から妻の実家である楊湾に移していた(形式上、妻の実家に婿入りしたことになる)ので、楊湾の居住家屋(妻の権利分も含む)に代わる新たな転居先の家屋として胡埭鎮に新しい住居を与えられた。
 - ・王元松の長女(王英, 1978年生れ)は、胡埭鎮謝堰村の戴氏(父親は戴六興)に嫁した。
 - ・王元松の長男(王文新, 1980年生れ)は、上海市の大学を卒業し、その妻は「本地人」であり、2014年12月現在、常州市の雪堰橋(1戸建て)と無錫市街地(マンションの1室)に別宅があり、雪堰橋や無錫市で仕事のために出張する際に、ホテル代わりとして利用しており、一方、胡埭鎮の本宅で1階を店舗にしている建物の2階・3階部分に両親(王元松・蘇麗雅)と一緒に暮らしている(後掲の写真1を参照)。
 - ・6男の王仁松は、中国人民解放軍の海軍に入隊して中越戦争(1979年2月)にも参加したことがあったという。そして、中国人民解放軍を除隊した後、地元の郷鎮企業(浄化設備工場)に入社し、2000年に同工場の経営者(私有化・民間払下げ)になった。なお、今回(2014年12月)の聞き取り調査によって、6男の王仁松について前回(2014年3月)聞き取りを行った内容にはいくつかの間違いがあったことが判明した(よって、この点からも、同じことを何度か聞くことが必要かつ重要であることを改めて確認することができた)。すなわち、まず、浄化設備工場はアメリカ資本との合弁企業であると聞いていたが、実はフランス資本との合弁企業だった。また、王仁松の息子(王文洋)は、ニュージーランドの銀行で仕事をしていると聞いていたが、実はニュージーランドで父親である王仁

松の不動産事業を引き継いでおり、無錫市で工場も経営しているという³⁾。さらに、王文洋の子供(娘)が無錫の学校で勉強していることもあって、しばしばニュージーランドから無錫に帰ってきているという。なお、王文洋の妻は、湖南省の出身であり、王文洋とは江蘇省鎮江市の大学で同級生だった。

- ・次女(王雪琴)の息子(王奇賢, 32歳)は、鎮江の大学を卒業した後、上海の外資系企業で働いている。
- ・3女(王雪萍)の娘(沈敏, 28歳)は、無錫高等師範大学を卒業した後、胡埭鎮中心小学で国語の教師をやっている。

王少生の子供たち

- ・長女(王徐萃)の夫(王振華)は、馬鞍村前呉巷の出身であり、同じく前呉巷の出身である呉文勉氏の妻の兄の息子だったが(よって、王少生氏と呉文勉氏とは親戚関係にあることになる)、2009年に事故で死去した。また、その子供(王醒元)は、南京市の大学を卒業した後、無錫のレンタカー会社で働いている。さらに、王醒元の妻(銭英)は、胡埭鎮の出身で、胡埭鎮安泰商業街にある洋服販売店で働いている。なお、王醒元(王振華の子供)には10歳になる娘がいる。
- ・長男(王建仁)は、かつてわが家が貧しかったので、中学1年生で中退せざるをえなくなり、採石場で「板車」(大八車)を修理する仕事に従事したが、その採石場が1982年に閉鎖したので、1985年頃に1台のトラクター(積載量1ト)を購入して農耕用に使用するとともに、そのトラクターで副業として建築資材などを運ぶ運送業を始めた。その後、再配分されていた自らの農地が工場用地に転用されていったので、耕作することができない農地がなくなり、農業を続けることができなくなっていった。こうして、1990年頃からは樟脳(その化学原料である「精奈」を含む)を生産する精益化工廠で生産(設備・稼働)を管理する仕事を始めた。そもそも、精益化工廠は、1991年に操業を開始したが、当初は「精奈」を生産する機器を製造していた。さらに、1993～94年頃、小規模な「板鋸廠」(溶接工場)を設立し、1990年代には農業はほとんど副業として従事するようになった。

た。2008～09年頃、その「板鍔廠」は現在のような本格的な工場になった。そして、王建仁の息子(王黎明)は酉年生まれで、2014年12月現在で34歳になった。なお、その王黎明がどのような経歴を持っているのかについては、今後、もう少し詳しく話を聞いてみたい。

- ・次男(王建亮)は、中学生の時にはちょうど文化大革命(1966～76年)中だったために、中学2年生で中退せざるをえなくなり、中学校を中退した後、3年間は、「泥瓦匠」(左官)をやった。その後、1984年前後にトラクター1台を約3,000円で購入して運送業に従事していたが、王建亮の妻(殷玉芬)の兄(殷産興)が「鑄鋼廠」を経営していたので、その工場で働くようになった。そして、その「鑄鋼廠」は、かつては郷鎮企業だったが、2000年頃に私有化した(払下げ額は分割払いの計100万元だったが、その後、生産効率が向上して収益が増大したので、実際には約10分の1しか支払わなかった)という。

胡埭鎮の状況

- ・1980年代後半以降、胡埭鎮は、全体として農業よりもむしろ建築資材などを運ぶ運送業に従事することによって富裕化したという。例えば、当時、21ヶ村の自然村からなる馬鞍村だけでも、1990年代には運送業(640世帯が従事)のためのトラクターが120台以上あった。
- ・王法興(かつて罪を犯して刑務所に入っていたことがあったという)は、王少生の長男(王建仁)が働いていた精益化工廠で「精奈」を製造する機器の設計図を盗み見て、自分でその機器を作り、樟脳機器製造工場を設立したという。そもそも、王法興は、それ以前にも江蘇省溧陽県に顔料の原料を買いに行つて、これを製造する機器の設計図を盗み見て、自分でその機器を作り、作業場を建て顔料を生産したことがあったという。そして、王法興については、この他にも実に様々な話を聞かされた。なお、王法興はすでに死去している。

(2) 無錫市濱湖区榮巷街道小丁巷

無錫市の地下鉄1号線は、すでに2014年6月には開通しており、今回、無錫駅から宿泊先のホテルまでの移動には地下鉄を利用した(2駅目で下車)。なお、地下鉄の無錫駅で「市民卡」(カード作成費が30元だが、これは「押金」(ディポジット)ではないので、「退卡」(カードの返却)をしても払戻金はないという)を購入したが、その窓口の職員の説明によると、この「市民卡」は、無錫市以外に、蘇州市や上海市でも利用することができるということだった(実際、安地君が上海市の地下鉄でも利用可能だったことを確認していた)。

なお、無錫市の地下鉄2号線は、2014年12月末に開通(12月18日頃に試運転の予定であるという)する予定であり、2014年12月15日現在、榮巷鎮までは地下鉄で行くことができなかった(地下鉄の榮巷站はほぼ完成していたようだった)、タクシーで行くことになった。

聞き取り日時: 2014年12月15日(月) 9:05~11:45

聞き取り場所: 榮紀仁氏宅

聞き取り対象者: 榮紀仁

聞き手: 弁納才一・湯可可

通訳: 安地雅博

次女(榮雪娟)

- ・次女の榮雪娟は、1962年に生まれた(寅年生まれ、2014年12月現在で53歳)。高校を卒業した後、無錫衛生学校(「大專」、看護師の専門学校)で3年間学んだ。そして、この専門学校を卒業した後、無錫市馬山の棉織十廠衛生室で「廠医」(工場の看護師兼医師)として働いた(「看病」、「配薬」、「接産」、「換薬」などの仕事に従事)。棉紡織工場である同工場内には女性労働者が多かった(ので、出産に立ち会う(「接産」)ことが多かった。よって、自らのスキルアップのために、無錫市の婦幼专科医院で1年間研修を受けて医師免許を取得し(能力を評価されて婦幼专科医院で勤務するように要請されたが、辞退して棉織十廠衛生室で勤務を続けた)、さらに、1ヶ月間、無錫の河埭口にある無錫市第四人民医院で「接産」の

研修を受けた。そして、棉織十廠の書記の紹介で、周勤偉と結婚した。

- ・次女の夫(周勤偉)は、無錫の鼇頭渚(太湖の近く)の出身で、常州紡織專科学学校(「中專」)で3年間学んだ後、馬山の棉織十廠で技師として働きながら、2年間、江南大学紡織系で学んだ。
- ・息子の周栄健(2014年12月現在で28歳)は、揚州師範大学(現在の揚州大学)文系を卒業した後、無錫市天一税務所有限公司に勤務している。また、その妻(陳倩)は、無錫で生まれたが、陳倩の父親はもともと蘇北の濱海県の出身者(人民解放軍に入隊して無錫市で勤務)であり、また、陳倩の母親は無錫の人だった。

太湖機械廠

- ・1979年9月17日、太湖機械廠の書記を務めていた王鶴鳴に同工場の「基建科」(基本建設科)科長として招聘された。実は、王鶴鳴は同工場の書記になるまで河埭生産大隊の書記を務めていたが、彼の父親(王仲秋、河埭生産大隊副大隊長)とは私(栄紀仁)が同科長になるまで聯合大隊副大隊長兼共産党青年団支部書記を務めていた時からの知り合いだった。なお、王鶴鳴とその父親のことについては、今後、もう少し詳しく話を聞いてみたい。
- ・太湖機械廠は、1965年に河埭口に隣接する青山湾(次女の栄雪娟がかつて一時的に研修していた無錫市第四人民医院の後ろあたり)に設立され、人民公社の解体に伴って郷鎮企業となっていた。
- ・太湖機械廠の「基建科」科長としての主要な仕事は、それまでの非常に簡易な作業場や建物を改築することだった。まず、金属加工工場(主に自転車の「刹車」(ブレーキ)を製造する工場)の建築を国営企業である「建築二公司」に委託し、また、大食堂(約600人いた労働者用)の建築を郷鎮企業である河埭郷建築公司に委託した。そして、これらの建築工事は、1982年冬に着工して、翌年7月に完成した。そもそも、そのための基礎工事として、1980～81年、西丁蚕桑生産隊の隊長夫人だった王秀珍が同生産隊に所属していた多くの女性を引き連れて同工場用地の地ならしと塀の基礎を掘る作業を行った(前稿⁵⁾を参照)。

- ・1985年、太湖機械廠の改築工事が全て完了したために、同工場の「基建科」は廃止され、保衛科・行政科・託児所・食堂・運輸・「搬輸工」・「泥水」(左官)・「木匠」(木工職人)・「小工」(未熟練工)・「電工」(電気工)・「種花」(棉花栽培、蘇州市光福から来た周「師傅」が担当)などの部署とともに、全てが「後勤部」(主に社員の福利厚生を担当)へ統合され、私(栄紀仁)を含む約200人が「後勤部」に異動させられた⁶⁾。なお、長女の栄雲娟は、結婚する前に、太湖機械廠で「油漆工」(塗装工・ペンキ職人)として働いていた。
- ・1987年、太湖機械廠の生産科長になり、汽車の「瓦背」(ブレーキの部品)を生産するようになった。なお、同工場の生産科長を務めていた時のことについては、今後、もう少し詳しく話を聞いてみたい。
- ・太湖機械廠は、1994年、私有化(民間払下げ)された。その際、それまで同工場長を務めていた栄徳培は、払下げ(買い取り)額である35万元を支払うことが非常に重い負担であると考えて所有者兼経営者になることを辞退した。そのため、その代わりに、栄紀仁の甥である栄福民が所有して経営することになった。
- ・1995年7月1日、太湖機械廠を定年退職した。

II 訪問地

(1) 無錫市胡埭鎮馬鞍村

12月14日(日)朝、筆者と湯可司氏・安地雅博君の3人は、筆者らが宿泊していたホテル(無錫錦江大酒店)の前でタクシーに乗ってひとまず梅園の前まで行き、そこで湯可司氏から連絡を受けて待ち合わせをしていた周孜正氏⁴⁾の自家用車に乗って馬鞍村まで行ってもらった。

こうして、今回も、午前中は、馬鞍村の無錫琳達織造有限公司の3階会議室で王望栄・王少生・呉文勉の3氏から話を聞いた。そして、その話を聞いた後、前回までと同様に、同企業の食堂(個室)で昼食を御馳走になったが、その食卓に同席していた同企業の経営者(呉文勉氏の長男)から、日本人はなぜ歴史の事実を曲解しようとするのかと詰問された。もちろん、筆者は中国近現代

史を研究している者として、安倍首相の歴史認識に対しては批判的であることを伝えたが、いわゆる安倍首相の歴史修正主義的な発言や態度・姿勢が我々の中国農村訪問聞き取り調査にも暗い影を落としていたと感じざるをえなかった。

同日の午後は、聞き取り調査を少し早めに終了し、15:00頃には同工場を離れ、筆者及び王望栄・湯可可の両氏と安地雅博君を含む4人は周孜正氏の自家用車に乗って、王望栄氏の5男(王元松)が住んでいる胡埭鎮(胡埭人民西路)の3階建ての家屋を参観した。そして、王元松は、その長男(王文新)一家とともに、3階建ての家屋のうちの2階・3階部分に住んでいるという(写真1を参照)。

写真1. 王元松・王文新親子の居住地



なお、同写真の中央(周孜正氏の自家用車が駐車している)に写っているのが、王望栄氏であり、その左側に立っているのが安地君である(2人は何かを話しているように見える)。2014年12月現在、胡埭鎮内の道路を通行しているのは自動車が圧倒的に多く、バイクや運送用のトラクターも少しはあるが、

写真2. 王元松が経営する一万油漆店



自転車に乗っている人をほとんど見かけることはなくなった。

また、その建物の1階部分は全て店舗となっており、その計8店舗のうち7店舗を貸出(テナント料を徴収)しており、1店舗のみは王元松が「油漆」(ペンキ)を販売する「一万油漆店」として経営している。そして、この一万油漆店の隣には、焼栗販売店と中国移动通信の店舗が見える(写真2を参照)。

ただし、我々が訪問した当日は、王元松の姿は見えず、その妻(蘇麗雅)が「一万油漆店」の店番をしていたので、ペンキなどを販売している同店舗内を参観させていただいた(その店舗の前では王元松の孫娘(?)が遊んでいた)。ちなみに、王望榮氏は、この近くのマンションに住んでいるようである。

その後、周孜正氏の自家用車に呉文勉・湯可可・安地雅博・筆者の4人が同乗し、かつて馬鞍村の主要な通婚圏の1つとなっていたと思われる常州市(武进県を含む)の雪堰橋村を参観した。ただし、雪堰橋村も、2014年12月現在、馬鞍村と同様に、いわゆる農村の面影はほとんどなくなっており、工業団地(常州市「雪堰工業集中区」)が形成されていた(写真3を参照)。

写真3. 雪堰工業集中区(旧雪堰橋村)



なお、馬鞍村から雪堰橋村へ移動する途中の道路沿いにも農地は全く見えず、工場が林立していた。

さらに、周孜正氏の自家用車に乗車して呉文勉氏を自宅まで送る途中で、護岸整備工事が行われてほぼ完成しつつあった太湖の沿岸及びその周辺の様子を参観した。その道路沿いには工事作業の名残が見えるが、まだ一般車両は全く通行していなかった(写真4を参照)。

写真4. 太湖の沿岸・沿道



写真5. 太湖の湖畔に林立するイギリス風の別荘群



一方、どのような人たちが所有しているのかは全く不明だが、太湖の沿岸部にはイギリス風の建築物を模倣したという別荘が林立していた(写真5を参照)。また、太湖沿道の工事はほぼ完成しており、まもなく沿道も全面開通するようだった。もちろん、その周辺一帯には農地は全く見られず、別荘群の周辺には広大な更地が広がっており、雑草が繁茂している。しかも、太湖を埋め立てることを禁止する石碑が建てられている境界線よりも太湖の内側に太湖の沿岸道路が造られていた。よって、これら一連の工事(太湖の埋立て)によって、太湖の総面積はかなり縮小してしまったという。

写真6. 呉文勉氏の自宅



最後に、太湖の近くにある呉文勉氏の邸宅を訪問したが(写真6を参照)、2014年12月現在、長男夫婦と同居中であるという。呉文勉氏の邸宅は、豪華なソファ・椅子・テーブルなどの家具類を備えているばかりでなく、庭(犬小屋あり)付き一戸建てで、まさに豪邸という雰囲気だった(写真7を参照)。そして、馬鞍村前呉村にある旧宅⁷⁾とは明らかに異なっていた。

写真7. 呉文勉氏宅の応接室と2階への階段



なお、その隣に建つ邸宅は孫のために準備されているという。近年、中国では、結婚する際に、男性側に家(新居)がないと結婚できないとされている。

そして、このような豪邸が建ち並ぶブロック(周囲は高い塀で囲まれており、その入り口には「太湖金色水岸」という高級住宅街の名称が見える)の正門には24時間常駐している守衛がいるのが見える(写真8を参照)。なお、豪邸が建ち並ぶ敷地内には庭園や池などもあった。

写真8. 呉文勉氏宅を含む高級邸宅地区の正門



(2) 無錫市栄巷街道

12月15日(月)午前中、栄紀仁氏宅で話しを聞いた後、昼食前に、鄭巷にある宋帝廟(2014年12月現在は鄭巷老年活動室を兼ねている)を訪問し、次女の栄雪娟に近くのレストランで昼食を御馳走になった。なお、2014年12月現在、栄雪娟は以前とは別の病院に勤務しているようである。

写真9. 宋帝廟・鄭巷老年活動室



写真10-1. 栄毅仁記念館の看板



近年、栄紀仁氏は、ほぼ毎朝、鄭巷老年活動室にもなっている宋帝廟に参拝しているという(写真9を参照)。ただし、当日、午後に参観に行った時には廟の門が閉じられていて、中に入ることはできなかった。なお、栄紀仁氏によれば、宋帝廟は朝のみ開門しているという。

写真10－2. 栄毅仁記念館の正門(「荣氏古里」)



湯可可氏に案内していただいて、栄毅仁記念館⁸⁾(写真10－1・写真10－2を参照)を訪問してみると、当日は閉館日となっていたが、湯可可氏が連絡を取って無錫市荣巷古镇历史文化研究所の責任者の方に来ていただいて、特別に同館内を案内していただいた。もちろん、同館内は全て写真撮影が禁止されているという看板が見えたが、同館内で集合写真を撮ることになった(写真11を参照)。なお、休館日だった当日も、同館の守衛室には数名の職員が出勤しており、同館内に設置された非常に多くの監視カメラの映像が映し出されていた。

写真11. 榮巷古鎮歷史文化研究所の責任者(左側)



写真12. 無錫市榮巷古鎮歷史文化研究所入り口



そして、栄毅仁記念館を参観した後、そのすぐ近くにある無錫市栄巷古鎮歴史文化研究所(写真12を参照)に立ち寄り、栄家企業にかかわる展示物と写真及び同建物2階の壁一面に栄家一族の家系図(「家譜」)が描かれていたのを参観し、最後に、栄家企業に関する書籍をいただいた⁹⁾。さらに、2014年12月末現在、修築・再建中だった栄巷鎮の街並み(「栄巷古鎮」?)を参観した。そこには、多くの商店が建ち並び、一般の居住地というよりは、古い街並みを再現した観光地となるようだった。

なお、同日夕刻、無錫市濱湖区政府の銭氏と夕食を共にした際に、無錫における農村聞き取り調査や農村社会経済に関する研究について意見交換することができたことは有意義だった。また、湯可可氏からは、現在の無錫農村を研究する上で有益な文献資料とも言える雑誌もいただいた¹⁰⁾。

(3) 上海

これまで上海市滞在中にしばしば利用してきた瑞金一路にあるレストラン(裕豊餐飲)は、今回、昼食時は近くの学校の生徒や店舗の常連客でにぎわっていたものの、夕食時はこれまでよりも客が少なくなっていた。しかも、淮海中路も人通りが以前よりも少なくなったように感じた。全体として、不景気感が漂っていた。

なお、2015年4月上旬現在、上海でも大気汚染が見られる。かつては、冬季のみ、石炭を燃焼させた臭いと大気汚染があったにすぎなかった。

ところで、2014年末現在、翌2015年1月より中国の銀行ではペイ・オフ(50万元まで保護)を実施する予定だったと聞いていた。だが、2014年12月現在、上海市内では全く金融面における混乱は生じておらず、中国における主要な銀行である中国銀行・交通銀行・中国工商銀行・農業銀行などの上海支店で銀行員に対してペイ・オフに関する話を聞いてみても、意外にも、ほとんど無関心だった。

(4) 南京

2015年3月下旬、南京を訪問し、張憲文氏(南京大学中華民国史研究センター長)及び馬俊亜氏(南京大学歴史系教授)と意見交換した。その際、日本軍による南京大虐殺事件に関する歴史資料をまとめられた張憲文氏からは安倍首相の歴史修正主義的な発言や態度について詰問された。そして、最後に、張憲文氏が主編した南京大虐殺事件に関する文献資料をいただいた。

一方、馬俊亜氏には南京大学図書館への紹介状を書いていただき、地下鉄に乘車して南京大学の新校舎(写真13-1を参照)の杜慶図書館において文献資料を閲覧・収集した(写真13-2を参照)。ところで、同図書館の前には、金陵大学(左側)と国立中央大学(右側)の石碑があり、その裏面にはそれぞれの由来・説明が記されていた。

写真13-1. 南京大学正門



写真13-2. 南京大学杜慶図書館



なお、南京大学の新校舎の地下鉄最寄駅は2号線南大仙林校区站であり、旧来の南京大学の最寄駅である珠江路站からは約40分を要した。

2015年3月末現在、解放前に刊行された文献資料や期刊雑誌などは新校舎の杜慶図書館に所蔵されているようである。なお、同図書館では、複写機が設置されていなかったため、文献資料を複写することはできなかったが、デジタルカメラによる撮影が許可されており、無料だった。

おわりに

今回、無錫市の2ヶ村(旧農村)における聞き取り調査では、もともと公有制企業だった郷鎮企業が私有化(民間払下げ)された時の状況について少し話を聞くことができて非常に興味深かった。これも、全て湯可可氏のおかげである。また、周孜正氏の自家用車による運転で無錫市の様々な場所を参観

することができた。

無錫市の2ヶ村におけるこれまでの聞き取り調査によって、個人史と家族史についてはほぼ全容が明らかになったと思われる。そして、本人、子供、孫のそれぞれの世代における仕事(経済活動)・結婚・生活などの様子から、各時期の農村経済の特徴をも垣間見ることができるように思われる。

今回、訪問した無錫市の2ヶ村は、ともに脱農化・都市化(農村の消滅)がかなり進行してきたことを見てきた。そこで、今後の聞き取り調査では、戸口(戸籍)の変更の有無とその状況について聞きたいと思う。

また、馬鞍村では、これまで聞き取り場所となっていた無錫琳達織造有限公司の歴史についても聞いてみたい。

注

- 1) 筆者がこれまで華東農村において行ってきた聞き取り調査については、拙稿「華東農村訪問調査報告(1)－2008年3月、江蘇省・上海市の農村」(『金沢大学経済論集』第29巻第1号、2008年12月)・同「華東農村訪問調査報告(2)－2008年9月、江蘇省・上海市の農村」(『金沢大学経済論集』第29巻第2号、2009年3月)・同「華東農村訪問調査報告(3)－2009年3月、江蘇省・上海市の農村」(『金沢大学経済論集』第30巻第1号、2009年12月)・同「華東農村訪問調査報告(4)－2010年2月・3月、江蘇省・上海市の農村」(『金沢大学経済論集』第31巻第1号、2010年12月)・同「華東農村訪問調査報告(5)－2010年12月、江蘇省の農村」(『金沢大学経済論集』第32巻第1号、2011年12月)・同「華東農村訪問調査報告(6)－2011年11月、江蘇省の農村」(『金沢大学経済論集』第32巻第2号、2012年3月)・同「華東農村訪問調査報告(7)－2012年3月、江蘇省の農村」(北陸史学研究会『北陸史学』第60号、2013年2月)・同「華東農村訪問調査報告(8)－2013年9月、江蘇省の農村」(『金沢大学経済論集』第34巻第2号、2014年3月)・同「華東農村訪問調査報告(9)－2014年3月、江蘇省の農村」(『金沢大学経済論集』第35巻第1号、2014年12月)を参照されたい。なお、これ以外に、華東地区の企業等への訪問記録として、拙稿「華東地域における日系企業の現況について－2009年9月」(『金沢大学経済論集』第30巻第1号、2009年12月)、拙稿(周如軍との共著)「中国華東地域訪問記録－2010年2月・3月」(『金沢大学経済論集』第31巻第1号、2010年12月)、拙稿「中国華東地域における日系企業への再訪記録－2012年3月」(『金沢大学経済論集』第33巻第1号、2012年12月)がある。
- 2) 前掲拙稿「華東農村訪問調査報告(9)－2014年3月、江蘇省の農村」。
- 3) 前掲拙稿「華東農村訪問調査報告(9)－2014年3月、江蘇省の農村」178頁。

- 4) 今回、同氏の博士学位論文(『疾風暴雨的年代－1949年前後中共対無錫大資本家の統合』華東師範大学人文学院歴史系, 2014年5月)をいただいた。
- 5) 同上拙稿173～174頁。
- 6) 栄紀仁氏が後勤部へ異動したのは1986年だったのだろうか(同上拙稿174頁を参照されたい)。
- 7) 前掲拙稿『華東農村訪問調査報告(9)－2014年3月、江蘇省の農村』181頁。
- 8) 当該記念館は、江沢民時代に建設されたようだが³(同記念館の看板には「江沢民」の揮毫が見える)、資金的について言えば、基本的には榮巷鎮政府によって建設されたという。
- 9) 上海商業儲蓄銀行文教基金会編『中国民族工業先駆榮宗敬生平史料選編－榮宗敬先生誕辰一百四十周年記念集』(広陵書社, 2013年)。
- 10) 無錫市档案局・無錫市档案館・無錫市档案学会『無錫档案』(2014年第1期・第4期), 惠山区政協学習文史和文教衛体委員会『惠風』(2014年第2期, 2014年10月)。

補記) 本稿は、科学研究費助成事業(基盤研究(C)(一般))2011年度～2015年度「近現代中国における農村経済発展モデルの構築と零細農化に関する実証研究」(研究代表者: 弁納才一, 課題番号23530411)による研究成果の一部である。